

たまのよこやま

1/1964 ～多摩ニュータウンの調査を振り返る～

多摩ニュータウン No.72・795・796 遺跡特集①1

学芸員のお仕事(1) 展示作業3

遺跡だより 日野市 平山遺跡5

令和4年度企画展示「境・道・恵—多摩丘陵の3つの顔—」解説(1)「境」6

7～9月のイベント 2022.....7

令和4年度企画展示 好評開催中

「境・道・恵—多摩丘陵の3つの顔—」



1/964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。



#52 多摩ニュータウン No72・795・796 遺跡特集①

多摩ニュータウン遺跡群の調査は、昭和40(1965)年に始まり、約40年かけて行われました。平成17(2005)年に調査が終了してから早17年が経ち、当時の調査を担当した職員の多くは定年退職を迎えています。そのため、このコーナーも今年度で終了することになりました。

今号も合わせて残り4回となったこのコーナーでは、多摩ニュータウン遺跡群きっての大遺跡「多摩ニュータウンNo.72・795・796遺跡※(以下、多摩ニュータウンは省略)」を連載で取り上げることになりました。

その調査成果が膨大なため、この小さなコーナーではなかなか取り上げることができなかった当遺跡について、調査担当者が振り返ります。

※No.72、795、796遺跡は行政上の理由で区分されていますが、当時の人々の生活範囲としては一体の遺跡と考えられるため、これらを同時に取り上げます。



No.72遺跡は、八王子市堀之内に所在し、多摩ニュータウン事業区域の中央北寄りにあたります。地形的には、多摩川支流の大栗川中流左岸に位置し、北側の寺沢川とに挟まれた丘陵先端の平坦面に立地します。南側の台地下には縄文時代草創期で著名なNo.796遺跡が隣接しています。

遺跡は約80,000㎡の広範囲に及びます。発掘調査は昭和62～平成13年にかけて8回実施されま



遺跡の位置

した。No.795遺跡は昭和63年に1回、No.796遺跡は昭和56～平成2年に7回調査されました。

調査の結果、旧石器時代～近代の遺構・遺物が発見されました。旧石器時代では石斧の製作跡、縄文時代では草創期の土器 (No.796)、古墳～平安時代では40軒以上の住居跡と水田 (No.795)、近代では明治期の小学校などがあります。中でも縄文時代前期初頭と中期の集落 (No.72・795・796) は特筆されます。前者は17軒の住居跡がまとまります。本地域で最大規模の集落です。後者は台地平坦面に楕円形に広がる環状集落で、275軒の住居跡、建物跡18棟、墓壇140基、埋甕33基、配石8基、集石、おとしあなどこう 陥穴土坑などが発見されました。多摩ニュータウン遺跡群の中で突出した大規模なムラであり、周辺を含めた地域の中核であったと思われます。

私がNo.72遺跡の調査に関わったのは第1次(昭和62～平成元年)と第7・8次(平成11～13年)で、環状集落本体の東半部(第1次)、西半部(第7・8次)および前期集落を手掛ける事になりました。今回は連載の1回目という事で、第1次調査に関わるエピソードに絞って紹介します。

本遺跡は、多摩ニュータウン遺跡群の中でも拠点的な縄文時代の集落として登録されていました。大規模な遺跡の本格的な調査という事で、ある程度の覚悟は決めていましたが、予想を遙かに凌駕する質量の遺構・遺物を前に、困惑を隠しきれない状況が続きました。集落本体の調査開始時、直前まで畑として利用されていた調査範囲を確認したところ、おびただ 地表面に夥しい土器片・石器類が目につき、ひょうどくつきく 表土掘削の前に採集する必要があると考え、ひょうさい 表採を始めたところ、コンテナ数十箱もの遺物が採集されました。一体この下にどれほどの遺構・遺物が存在しているのかと期待と不安に駆られた記憶があります。

いざ調査を開始すると、案の定、幅の広い黒い帯が台地先端部を巡って検出されました。この帯は

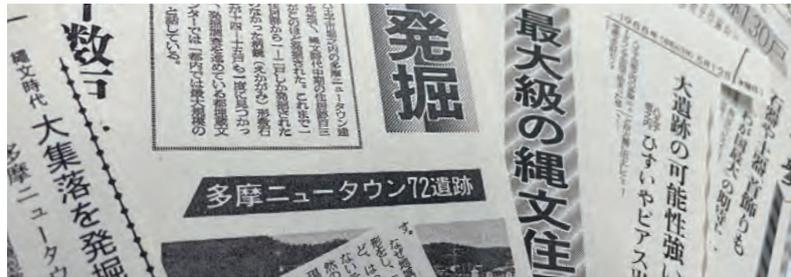
全て住居跡の覆土^{ふくど}であり、数軒～数十軒と重複した結果、ほぼ地山^{じやま}がみられない程の広がりでした。最も多い例では25軒の住居跡が重複していました。わずかに残る地山部分も、集石、埋甕、柱穴などが密集しており、足の踏み場もない状態でした。一つの例として、台地縁辺には畑を囲む溝がありましたが、その溝の中には、埋没土を凌駕する土器・石器が大量に出土し、土を掘るより遺物採集^{てい}といった体であったのを思い出します。暗中模索・試行錯誤を繰り返す中、黙々と調査に明け暮れ、終了には20か月を要しました。当初は6か月のスケジュールで臨みましたが、期間延長、他2班投入というテコ入れを行い、辛うじて乗り切ったという実感でした。

当センターに勤務して7年目、初めて臨んだ縄文時代の大集落の調査は、混迷と混沌の中、終了しましたが、調査中、各種マスコミ、多数の研究者の方々の来訪を受け、No.72遺跡が一躍「時の人^{あんとん}」となる中で、その後の整理・報告計画を考えるに暗澹^{あんたん}たる思いが擡^{こみあ}げられるのを否定できませんでした。

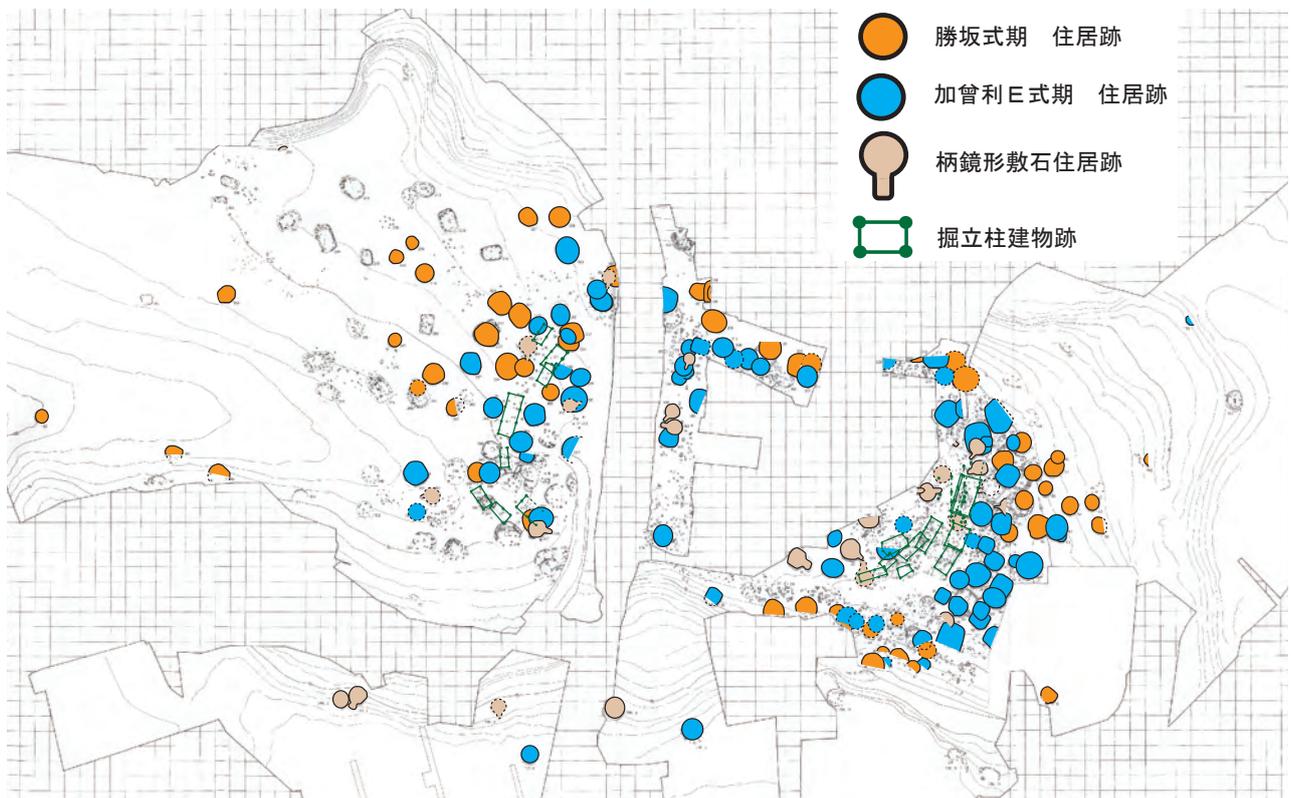
第1次調査を終えて、自身の力量不足を実感していましたが、調査方法・手順、事業者との調整、マスコミ・来訪者対応などの経験は、その後の調査においてどれほどの糧^{かて}になったことか、苦勞^{かい}の甲斐があったというものです。(丹野 雅人)



密集する住居跡群



遺跡を取り上げた新聞記事の数々



住居跡の分布図

学芸員のお仕事 (1) 展示作業

当館では常設展示とは別に1年に1度企画展示を開催しています。博物館や美術館のさまざまな仕事の中でも企画展示の開催は一般の方の目に触れやすいものですが、その裏で学芸員が具体的にどんな作業をしているのかはなかなか見えにくいのが実際です。今回は、今年の企画展示「^{さかい}境・^{みち}道・^{めぐみ}恵—多摩丘陵の3つの顔—」を例に、当館の学芸員の仕事ぶりの一端をご紹介します。と思います。

企画

何をおいてもまず決めなければいけないのは展示のテーマ。当館では広報学芸担当の職員がそれぞれに企画書を持ち寄って、コンペ方式で次年度の企画展示のテーマを決めるという方式をとっています。今年度の企画コンペの打ち合わせは昨年9月末に行い、多摩丘陵の地形的特徴と人間との関わりをテーマにすることになりました。

トピック・展示物検討

テーマが決まると、次はそのテーマに沿って全体の展示の流れを考え、展示トピック・展示物を検討していくこととなります。もちろん企画書の段階で大まかに想定してはいるのですが、ここからは担当内で議論をしながら内容を具体的に確定させていきます。

この作業にあたってフル活用するのが、遺跡の発掘調査後に出版される発掘調査報告書です。どういった場所から、どういう状態で出土したモノか、発掘調査が終わった後、遺物についての情報を与えてくれるものは報告書しかありません。展示作業に関わると良質な発掘調査報告書を作成することの大事さが身にしみて感じられます。

展示品も最初は報告書に載っている図面や写真を



報告書を読んで展示する遺物を洗い出す

もとに選定していくのですが、いざ実物を見てみるとイメージと違うこともあり、場合によってはその展示品を出品するのを止めて展示トピック自体を考え直さなければならないこともあるのです。

展示ケース・全体イメージ

展示品や全体の流れが決まると、それぞれにふさわしい展示方法を考えることとなります。各トピックで伝えたいことを簡潔に、かつ各展示品をできるだけ印象的に、美しく見せることが理想ですが、言うは易し、試行錯誤の繰り返しです。

実際の例を挙げてみましょう。多摩ニュータウンNo.72 遺跡は縄文時代に北陸や中部地方と関東地方の交流の中心になったと考えられる大遺跡で、黒曜石の原石や貴重な^{ひすい}翡翠の^{たいしゅ}大珠が出土しています。今回の展示ではそれを象徴的に表すような展示にしたいと思い、翡翠の大珠を大量の黒曜石が取り巻くようなレイアウトを計画しました。展示面は乳白色アクリルとし、下と周囲からLEDで全面を照らすことで黒曜石の透明感とガラス質の光沢を際立たせることを狙います。

問題になったのは翡翠で、緑色の美しい色を見せるには背後から光を当てるのが効果的であるとわかったのですが、厚みのある翡翠を透かして光らせるのに一苦勞。LEDを遺物にほぼ密着させて強い光を当てることで周辺の薄い部分を緑色に光らせることに成功しましたが、一方で強い逆光が眩しくないように周囲は十分に遮光しなければならないなど、展示具の製作になかなか^{なんじゅう}難渋しました。



縄文時代の翡翠と黒曜石の展示（右は翡翠ケース）

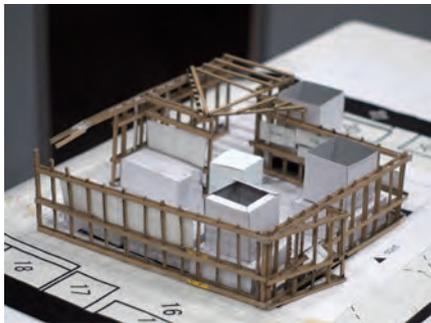
全体のレイアウト・デザインについても検討しなければなりません。後述のように、パネルのデザインなどについて統一したものを作るのも当然必要なのですが、当館ならではの？の問題もあります。当館

当センターの調査研究員の多くは都内の発掘調査に出向いていますが、その一部はセンター本部の「中の人」として、広報学芸業務に従事しています。その仕事ぶりや、いかに。

ではスペースの関係から、一つの展示室で常設展示と企画展示の両方を行うことになるため、直観的に両者が区別できるように見た目を工夫しなければならないのです。今回は格子状の構造物で企画展示スペースを区切ることになりましたが、圧迫感を軽減するため完全に遮蔽^{しゃへい}はせず、木の柱をむき出しにすることにしました。

設計図

個々の展示具や全体のイメージが固まると、次は設計図の作成です。展示具の造作や設営は専門の業者さんに依頼するのですが、そのために細かい寸法や仕様を記載した設計図が必要となるのです。各ケースの設置位置もここで確定させますが、大きなケースを複数配置することを考えると展示室も意外と余裕がなく、頭を悩ませます。意外と忘れがちなのが電源の問題で、各ケースの照明用電源をどこのコンセントからとるのかもこの段階で考えておく必要があります。



レイアウト検討のため作成したダンボール製模型

パネル文・デザイン

企画展示の解説パネルについて、当館では解説文の作成だけでなく、パネルのデザイン自体も学芸員が行っています。デザインの素案が出来ると、実寸で印刷したものを実際の遺物とともに並べてみて、文字や写真の位置や大きさとのバランスを検討します。見た目をスッキリさせるため、遺物のキャプションを直接パネル自体に印刷してしまうことが多いのですが、この場合遺物の配置位置等を事前にかなり厳密に決める必要があります、なかなか苦労します。解説パネルの印刷は設営業者さんが行いますが、その入稿締め切り直前が展示準備期間で一番忙しい時期かもしれません。

設営・公開

今年の展示の設営は3月16～18日の3日間で行いました。16・17日は設営業者さんによる作業日で、壁や新規製作展示台の搬入・据付から始まって、解説パネルの設置、電源コードの配線とさまざまな作業がそれぞれ専門の職人さんを交えて手際よく進められていきます。展覧会が多くの人の力で成り立っていることを実感する時間です。



設営業者さんが手際よく作業を進めていく

展示台の位置が確定すると、次は学芸員が実際に遺物を配置していきます。微妙な方向や位置の調整等、事前にどれだけ想定していても実際に並べてみるとどこまでも気になるところが出てきます。位置が確定したら衝撃や振動に備えてテグスなどで遺物を固定し、最後に展示室に据え付けてある照明のあて方を調整して長かった展示作業は一旦終了です。



どう遺物を設置するか検討中

ここまで企画展示の準備について書いてきましたが、いかがだったでしょうか？限られた紙面のため、書ききれなかったことも多くありますが、少しは雰囲気伝わったかと思います。このように「中の人」は毎年いろいろ苦労して作っている展示ではあるのですが、それが成功しているかどうか判断するのは見る方次第。ぜひご自分の目で確かめにきてみてください。(舟木 太郎)

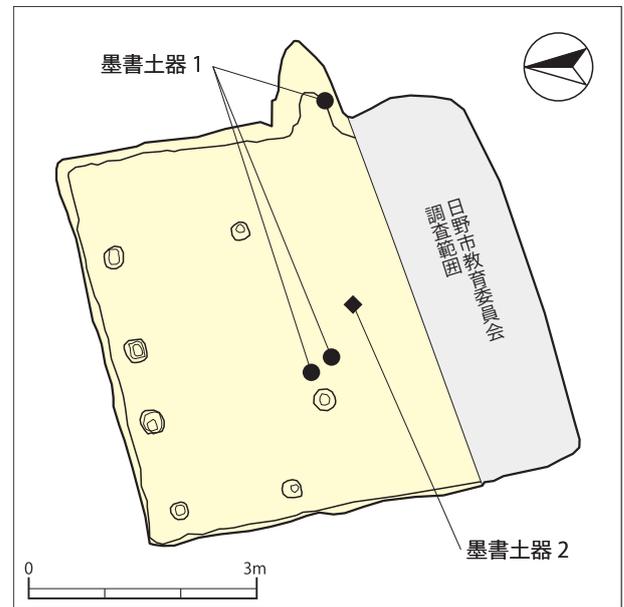
日野市 平山遺跡

所在地 : 日野市豊田三丁目～西平山四丁目
 調査期間 : 2016年2月～(発掘調査中)
 調査面積 : 7,330㎡(令和4年度)

平山遺跡(日野市No.22)は、日野市豊田三丁目から西平山四丁目にかけて広がる遺跡で、浅川左岸の河岸段丘上に立地します。当センターによる発掘調査は平成28年2月から開始され、現在も継続して行われています。令和3年3月には、平成27・28年度に発掘調査が実施された調査地点の報告書が刊行されました。^{註1}

今回紹介するのは、令和3年から4年にかけて発掘調査を行った4-1区で出土した2点の墨書土器です。これらは、201号住居跡(平安時代)の貼床に埋まったかたちで発見されました。墨書土器1は複数の破片が散らばった状態で見つかりましたが、墨書土器2はまとまって出土しました。どちらも須恵器杯で、内面の中央に墨書が施されています。墨書で記された文字については、現時点でどちらの文字も判読できていません。これらの文字は一見すると異なる文字のように思えますが、よく観察すると、右側のつくりが似ているようにも見えます。また、「飛」に近い字形のように見えますが、ほかの遺跡で出土した「飛」の墨書と比較すると、字形がやや異なる印象を受けます。

ところで、201号住居跡の貼床内からはこれらの墨書土器のほかに、須恵器や土師器、灰釉陶器といった多くの土器が出土しました。その量を考えると、住居の床面を構築している最中に偶然に混入したというよりは、何らかの意図をもって土器の破片を埋めたように思えます。それが竪穴住居の構築にまつわる祭祀やまじないなどが行われたことを示すのであれば、これらの墨書土器は何を意味し、どのような願



201号住居跡 墨書土器の出土位置

いや祈りが込められたのでしょうか。

現状では不明な点が多くありますが、今後、調査成果を検討し、墨書された文字の判読や、貼床に埋め込まれた遺物の意味などを探っていきたいと考えています。

なお、201号住居跡の南側約1/3は、日野市教育委員会による発掘調査が行われています。この時の調査でも、今回紹介した墨書土器と同様のものが見つかっています。^{註2} (小西 絵美)

註1:『平山遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第368集 東京都埋蔵文化財センター

註2:日野市教育委員会宮本涼子氏よりご教示いただきました。



墨書のある須恵器杯(左:墨書土器1、中央:墨書の拡大写真、右:墨書土器2)

むさしの 武蔵野台地と さがみの 相模野台地を分け隔てるように連なる 多摩丘陵は、地理的な区分だけでなく人々の社会行動にも影響を与えています。特に、この多摩ニュータウン南西部に位置する町田市相原・小山地区と呼ばれる丘陵の縁では、西から来た人々の移動を遮るような現象が、特定の遺物とその遺物が出土した遺跡の分布から読み解くことができます。今回は、企画展示テーマの一つ「境」について3点解説します。

まず一つ目の縄文時代早期後半(約8,500年前)の時期には、静岡県東部から神奈川県を中心に分布する「清水柳E類」と呼ばれる土器が現れます。この土器が出土する遺跡は、東京と神奈川の都県境である境川に面した丘陵縁部に分布が集中しています。一方、丘陵内部にも同じ時期の住居が検出された遺跡は僅かに散見されますが、同じ特徴を持つ土器はほとんど見つかりません。そればかりか、実は丘陵内部の遺跡には、獣を捕まえるための陥し

穴が多く確認されています(図1)。歩みを留める現象の背景には、土地の利用方法の違いを示す境界としての顔も覗くことができます。

二つ目は、古墳時代初頭(約1,650年前)の時代に丘陵の縁に現れる「東海系土器」です。TN No.916・917 遺跡(TNは多摩ニュータウンの略、以下同)では東海地方西部で作られた土器が見つかりますが、丘陵内部には同様の土器はおろか、同時期の住居跡を残す遺跡すら見つかりません。近隣には、畿内や伊勢湾方面で作られた土器が見ついている TN No.918 遺跡も立地しており、この相原・小山地区でも極めて局部的に遺跡の分布が留まっている様子が伺えます。

また、三つ目の奈良時代(約1,300年前)に現れる静岡県東部地域を中心に分布する「駿東型」の土器も、見つかりている遺跡の分布が前二つの時代と同じような位置に留まる現象が見られます。

このように、縄文時代から古代に至る3つの時代で同じような場所に遺跡が立地し、いずれも丘陵より西側に分布する特定の土器と密接に関連していることが注目されます。起伏の少ない台地を歩んできた西から来た人々にとって、それだけ丘陵の存在は大きく立ちはだかったのでしょう。社会が変化しても何度も同じような現象が繰り返される歴史の不思議さ、面白さを、多摩丘陵の地に垣間見ることができます。

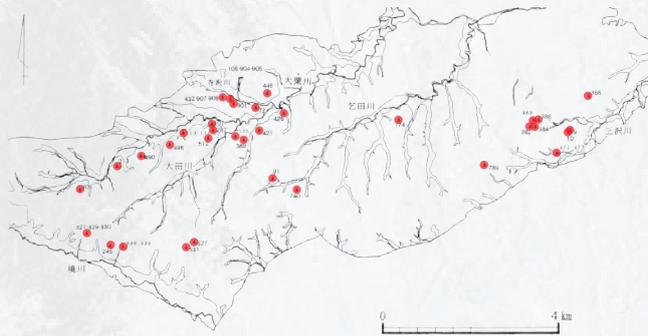


図1 陥し穴土坑多出遺跡の分布と水系(金持2002に加筆)

(塚田 清啓)

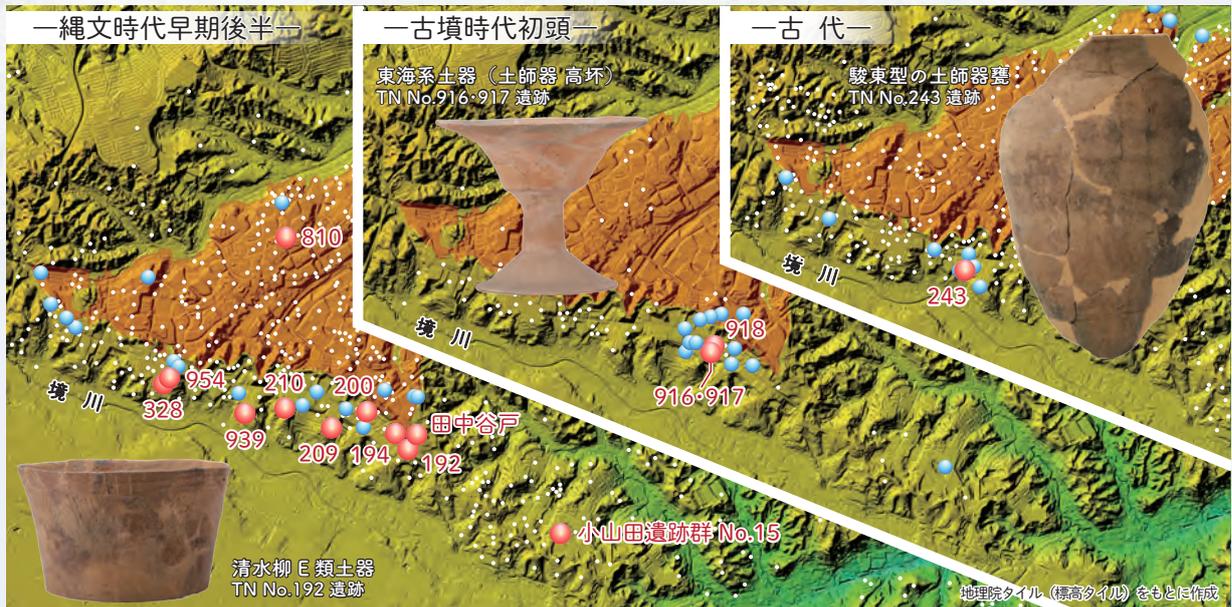


図2 各時代の土器と分布(赤丸が各土器の出土した遺跡位置)

※金持健司 2002「多摩ニュータウン遺跡群における早期後半の遺構と遺物」『東京都埋蔵文化財センター 研究論集XIX』

7～9月のイベント 2022

夏休みの思い出に、自由研究に！

7月から9月に開催予定のイベントを紹介します。参加はすべて無料です。

※10月1日の「縄文土器の野焼き②」は、9月のイベントとセットのため掲載しています。



📖 展示解説 / 🌿 庭園 / 🎭 体験
🗣️ 講演会・発表会・上映会

大人向け：概ね中学生以上
親子等：小学生（事業により異なる）と保護者
低年齢向け：幼児～小学生低学年と保護者

日時(予定)		行事名	対象	人数	申込	締切(必着)		
7月	23日(土)	9:30～16:00	🎭	親子縄文土器作り (8/20の野焼き①とセット申込)	親子等	8組(16名)	事前申込	7月7日(木)
	27日(水)	10:00～12:00	🎭	親子勾玉作り①	親子等	8組(16名)	事前申込	7月11日(月)
		13:30～15:30	🎭	親子縄文の布作り①	親子等	8組(16名)	事前申込	7月11日(月)
	29日(金)	13:30～15:30	🎭	親子縄文土器観察会	親子等	8組(16名)	事前申込	7月13日(水)
8月	2日(火)	10:00～12:00	🎭	親子縄文レリーフ作り①	親子等	8組(16名)	事前申込	7月18日(月)
		13:30～15:30	🎭	親子縄文レリーフ作り②	親子等	8組(16名)	事前申込	7月18日(月)
	11日(木・祝)	10:00～12:00	🎭	親子火おこし道具作り	親子等	8組(16名)	事前申込	7月25日(月)
		13:30～15:30	🎭	親子勾玉作り②	親子等	8組(16名)	事前申込	7月25日(月)
	17日(水)	10:00～12:00	🎭	【低年齢向け行事】 植物から糸を作ろう	低年齢向け	8組(16名)	事前申込	8月1日(月)
		13:30～15:30	🎭	親子縄文の布作り②	親子等	8組(16名)	事前申込	8月1日(月)
	20日(土)	9:30～13:30	🌿	縄文土器の野焼き①	どなたでも	見学自由	—	時間内見学自由
	23日(火)	① 9:30～10:30	🎭	【低年齢向け行事】 お子さま縄文教室①	低年齢向け	各回 8組(16名)	事前申込	8月7日(日)
② 13:30～14:30								
③ 15:00～16:00								
24日(水)	① 9:30～10:30	🎭	【低年齢向け行事】 お子さま縄文教室②	低年齢向け	各回 8組(16名)	事前申込	8月7日(日)	
	② 13:30～14:30							
③ 15:00～16:00								
9月	3日(土)	9:30～16:00	🎭	縄文土器作り(二日間+10/1の 野焼き②とセット申込)	大人向け	8名	事前申込	8月18日(木)
	4日(日)							
	10日(土)	10:30～11:30	📖	企画展示解説会③	どなたでも	10名程度	当日受付	時間までに集合
		13:30～15:30	🗣️	文化財講演会 (企画展示関連)②	どなたでも	90名	事前申込	8月24日(水)
	22日(木)	10:00～12:00	📖	学芸員ギャラリートーク 大昔の多摩を語る①	どなたでも	10名程度	当日受付	時間までに集合
13:30～15:30		🎭	縄文の布作り②	大人向け	8名	事前申込	9月7日(水)	
27日(火)	① 9:30～11:00	🎭	トンボ玉作り②	大人向け	各回6名	事前申込	9月10日(土)	
	② 11:30～13:00							
	③ 14:00～15:30							
10月	1日(土)	9:30～13:30	🌿	縄文土器の野焼き②	どなたでも	見学自由	—	時間内見学自由

●新型コロナウイルス感染症対策のため、行事を延期または中止とする場合がございます。当センターホームページでお知らせいたしますので、随時ご確認ください。

- 「事前申込」はWebの申込みフォーム、または往復はがきでの申込みとなります。
 - Webの申込みフォームは、**申込締切日の約1か月前に当センターホームページ内に掲載**いたします。
 - 往復はがきでの申込みは、「どなたでも」「大人向け」の行事では1人につき1枚、「親子等」「低年齢向け」の行事では1組(2名まで)につき1枚の往復はがきが必要です。
- 「行事名・住所・氏名・年齢・電話番号」をご記入の上、〒206-0033 多摩市落合1-14-2 東京都埋蔵文化財センター ○○○(行事名)係宛 までお申込みください。
- いずれの行事も**応募者多数の場合は抽選**となります。
 - ご記入いただいた個人情報は、該当事業実施の目的のみに利用します。利用目的に同意の上、お申し込みください。

※今号の表紙：多摩ニュータウン No.72 遺跡の集落東側を写した航空写真。



たまのよこやま 129

2022年6月30日発行

東京都埋蔵文化財センター 〒206-0033 多摩市落合1-14-2 TEL 042-373-5296 <https://www.tef.or.jp/maibun/>

